



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	2025H0PS 地方議員・地方公務員向けサマースクール「北海道の豊かな自然と資源を生かした観光まちづくり」の開催について
Author(s)	中山, 隆治; 今井, 太志; 田中, 謙一 他
Citation	年報 公共政策学, 20, 171-180
Issue Date	2026-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99431
Type	other
File Information	20-10_Report_Summer_School.pdf



2025HOPS 地方議員・地方公務員向けサマースクール 「北海道の豊かな自然と資源を生かした観光まちづくり」 の開催について

中山隆治 今井太志 田中謙一 田中みどり 原田朋子 溝渕清彦 武藤俊雄
(北海道大学公共政策大学院2025年度サマースクール委員会)

北海道大学公共政策大学院（HOPS）では、公共政策学を実践する人材を育成することを目的として、ほぼ毎年度、「HOPS 地方議員・地方公務員向けサマースクール」を開催しており、第17回目となる2025年度は下記の通り開催したので報告する。

1. テーマ

【メインテーマ】「北海道の豊かな自然と資源を生かした観光まちづくり」

【趣旨】

観光立国を目指す政府の施策の展開に始まったインバウンド観光客の増大は、新型コロナウイルスの影響を跳ね返しつつ堅調な回復基調にあり、一部では観光公害と言われるような状況も出現しているが、その一方で、人口減少が続く地方の現場にまでその恩恵は及んでいない状況も続いている。北海道は、国内外の観光客が求める「自然」「食」「温泉」などの魅力にあふれているが、それを生かし切れていない市町村も多く、地方政治・地方行政の対応が今後の地域の「観光まちづくり」、ひいては地方創生の成否を分けると言っても過言でない。このため、今年度のサマースクールのテーマを「北海道の豊かな自然と資源を生かした観光まちづくり」とし、北海道の豊かな自然と、豊かな一次産業や温泉等の資源を生かした観光まちづくりによる地方創生を考える場とすることにした。

2. 開催日時・場所・プログラム等

例年の通り、対面形式で講義とグループディスカッションを実施する「2日コース」とリモート形式で講義のみの「1日コース」の2つのパターンで実施した。

【2日コース】

2025年8月20日(水) 13:30～17:30

8月21日(木) 10:00～16:00

北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟において対面で実施。(1日目は、オンラインを選択することも可)

【1日コース】

2025年8月20日(水) 13:30～17:30

(希望者は21日午前の講義の受講可)

オンライン (Zoom) で実施

※プログラムは、後掲のとおりである。

3. 受講対象・定員・受講料

3.1 受講対象

- ・地方議会議員（立候補予定者を含む。）
- ・地方公務員（関連団体等への出向中の者も含む。）
- ・観光協会や観光DMO・DMC職員（テーマに鑑み、今年度に限る。）
- ・HOPS院生の希望者について「聴講」を認める（1日コースに限る。）

※道外の地方議員・公務員等も参加可能

3.2 受講定員

2日コース：最大40名程度

1日コース：最大100名程度

3.3 受講料

- 2日コース 地方議員 : 8千円
地方公務員等 : 6千円
1日コース 地方議員 : 6千円
地方公務員等 : 4千円
(HOPS学生の聴講: 無料)

※HOPSが厳しい財政状況に直面する中で、持続可能性を確保するため、2025年度も受講料を若干引き上げた。

4. 主催・後援・協力

主催: 北海道大学公共政策大学院

後援: 北海道市長会・北海道町村会・北海道市議会議長会・北海道町村議会議長会

協力: 北海道

※後援・協力団体には広報・周知を依頼。

今年度は、北海道議会事務局と北海道観光機構に対しても、周知を依頼した。

5. 受講者数

最終的な受講者の総数は51人。その内訳は、次のとおりである。

【2日コース】34人

議員: 15人 公務員: 17人

その他: 2人

【1日コース】17人

議員: 9人 公務員: 8人

【合計】51人

議員: 24人、公務員: 25人

観光協会その他: 2人

6. 実施内容

2日コースの内容を中心に説明する。

6.1 開講挨拶

北海道大学を代表し、行松泰弘理事（社会連携担当）より開講挨拶。

まず、ゲストスピーカーや後援等団体に対する感謝の意が示され、北海道大学が2026年に創基150周年を迎え、地域と連携

した知の発信や社会課題の解決に取り組んでいることが述べられた。さらに、今回のサマースクールは「北海道の豊かな自然と資源を生かした観光まちづくり」がテーマであり、地域観光について専門家の講義や参加者同士の意見交換を通じ多角的な議論を期待していること、そして、自治体間の横のつながりが持続可能な観光振興に資することが強調され、今回の出会いと学びが地域の新たな一歩になると述べた。

6.2 趣旨説明

HOPS 中山隆治教授より、サマースクールのテーマである「北海道の豊かな自然と資源を生かした観光まちづくり」について、その趣旨が説明された。

「観光まちづくり」のためには、ブランディングやガイド等を用いた旅行商品造成、人材育成、プロモーション等を駆使して地域資源を地域の宝にすることと、そのための宝探しと磨き上げを行う推進体制の重要性について事例を参照しつつ紹介された。最後に講演者4名が紹介された。

6.3 講演1「地域資源の観光活用 ～魅力づくりの事例集～」

講師: 静岡県立大学大学院ツーリズム研究センター/経営情報学部講師 寺崎竜雄氏（元・（公財）日本交通公社常務理事）

講演ではまず、国の観光政策の歩みが振り返られた。1963年の観光基本法制定は、国の観光施策の方向を定める大きな出発点であり、1989年のバブル崩壊を契機に観光は資源消費型から地域に根差した着地型・高付加価値型へと転換していった。その後、2003年の観光立国宣言、2015年以降のインバウンド需要拡大といった政策展開を経て、観光が日本の成長戦略の柱として位置付けられていったことが示された。

続いて、地域資源の具体的な活用方法に

ついて、富士山や屋久島、福島県相馬市などの事例が紹介された。従来は資源そのものを消費する観光が中心だったが、これからは人が関与することで新たな価値を生み出す付加価値型観光が重要になると指摘された。ガイドによる案内や体験型のプログラムを組み合わせることで観光客の満足度は高まり、同時に資源の保全や継承にもつながる。観光は単なる経済活動ではなく、地域資源を守りつつ新たな魅力を生み出す営みであることが強調された。

福島県相馬市松川浦の事例では、地域住民が主体となって自立的な観光振興を進め、主役と脇役の役割分担、成功体験の共有、地域内外の人々を結ぶ取組みが成果を上げたことが紹介された。観光による収益や知識を地域の安定的な暮らしと両立させるためには、観光客の満足、地域資源の保全、住民の安心の要素のバランスが不可欠であると示された。

最後に寺崎先生は、地域のこだわりや思いを市場にどう届けるかが重要であり、その方法を地域自身が模索し続けることが必要だとまとめた。参加者にとって、自らの地域の将来を考える上で多くの示唆が得られる講演となった。

6.4 講演2「にっぽんの田舎を元気にする！」

講師：(株)Local Governance 代表・東亜大学医療学部客員教授 寺本英仁氏（元・島根県邑南町課長）

スーパー公務員と称された自治体職員時代の取組みとして、島根県邑南町での、地元食材・移住者・シェフ人材育成等を掛け合わせた「A級グルメ」構想並びに「耕すシェフ制度」の取組み、地域の主力である一次産業への支援として道の駅の産直売場やA級レストランを活用した「地域内販路構築施策」の取組みなどが、コロナ禍での

厳しい顛末なども含め、紹介された。いずれも、東京など大消費地に無理に目を向けるのではなく、逆に地域に消費者を呼び込むことで、地域経済の活性化や移住者増に繋げた事例とのこと。

取組事例に引き続き、現在力を注いでいる「自治体職員向けビレッジプライド研修」に関しての話があり、さらには地域ブランド（隣にはない我が町独自のコト、モノ）を考える際必要な要素としての「ブランド力の構成要素」「ブランド化の道筋」「認知と希少に注目した付加価値の分解」「価格設定の妙」「ターゲットの絞込み」などが、寺本先生の経験に裏打ちされた考え方として講義され、最後には、本サマースクール参加者を叱咤激励された。

6.5 講演3「エコツーリズムと宝探しによる観光まちづくり」

講師：文教大学大学院国際学研究科長/国際学部国際観光学科教授 海津ゆりえ氏

海津先生は観光資源を地域に即して活用することを研究している。

20世紀の観光は環境や地域社会に様々な課題を生み出した。ガラパゴスでは野生動物に触れる観光が人気を博し、タンザニアではハンティングが行われ議論の対象となった。ある経済学者は、野生動物を見る・学ぶ観光の対象として活かす方が、経済的利益がより大きいとする研究を行った。また、バリ島の漂流物や、コスタリカの防虫スプレーによる生態系への影響等、観光大衆化に伴う課題解決がエコツーリズムの端緒であるとした。

日本においても、観光は地域振興の利点を有する一方、ゴミや騒音の発生などの負の側面も大きい。1970～80年代には多様な概念が登場し、近年では「リジェネラティブ・ツーリズム」が提唱される。1990年代に環境庁が西表島でのパイロット事業を推

進し、98年にエコツーリズム推進協議会、2007年には議員立法によりエコツーリズム推進法が成立した。北海道では「てしかがえこまち」（弟子屈町）が認定されている。

エコツーリズムの本質が、資源保護・観光推進・地域振興という三要素を結ぶ三角形で示され、これらは地域では通常、異なる主体によって担われ、うまく循環させるには関係者の調整連携が不可欠とした。さらに、「地域における宝探し」の手法が紹介された。自然や生活文化の中から資源を探し、磨き、誇り、伝え、興す活動を通じて、地域の誇りを回復し、未来への遺産を再発見する。3人いれば開始でき、エコツーリズム推進と地域資源涵養につながる。

また、参加者からの質問に答える形で、地域に必要な人材がいないケースでも、専門知識を有する地元の中学校教員が参画して推進した例を示すなど、地域人材を掘り起こすこともエコツーリズムでは必要な過程であると助言された。

6.6 講演4「信州いいやま観光局と着地型コンテンツ開発」

講師：北海道大学観光学高等研究センター/大学院国際広報メディア・観光学院 准教授 小泉大輔氏（元・信州いいやま観光局）

小泉先生が自身で経験された、長野県飯山市における着地型観光の取組みについて解説された。小泉先生は2004年から飯山市観光協会職員として勤務し、信州いいやま観光局（DMO）設立に深く関わった。

かつて飯山市は、昭和30年代からスキー観光で栄え、ピーク時には年間150万人に迫る観光客が来訪した。しかし、スキー人口の減少に伴い、観光客は30万人を下回るまでに激減。これまでの「通過型」観光から、地域に滞在して楽しむ「着地型」への転換が急務となった。

この転換の核となったのが、自然保護を

重視した当時の小山邦武市長の決断で、リゾート開発を阻止し、代わりにグリーンツーリズムを推進した。特に、豊かなブナ林が残るなべくら高原には体験施設「森の家」を設立し、地域外から採用した専任インストラクターが、郷土の文化や料理を観光客向けの魅力的なプログラムへと昇華させる役割を担い、地域の人々と共に新たなコンテンツを創出した。

さらに、観光協会が自ら旅行業登録を行い、バスなどの交通手段と体験プログラムを組み合わせたツアーを企画・販売する体制を構築し、旅行会社に依存せずに地域が主体的に収益を確保できる仕組みを作り上げた。この試みから生まれたツアーブランド「飯山旅々。」は、地域固有の原風景や文化を盛り込んだ企画として、全国的なコンテストで大賞を受賞した。

北陸新幹線の飯山駅開業を機に、周辺自治体との連携を強化し、広域観光連携「信越自然郷」を設立。飯山駅構内には観光案内所とアクティビティセンターを設け、各地域の体験プログラムの斡旋・販売機能も持たせた。これら一連の取組みは、観光を単なる産業としてではなく、「住民本位」の理念のもと、地域全体が連携して進める地域づくりの核と位置づけられた事例として紹介された。

6.7 グループディスカッション

参加者は、A班からE班までの5班に分けられた。同一自治体からの参加者は重複しないように配慮しつつ、基本的にはなるべく同一地方で班を編成した。

参加者は、あらかじめ自らの市町村における地域の宝（地域観光資源）について、事前に取りまとめてきており、まずは各自それを発表した。

発表された地域観光資源が点在する架空の市町村をイメージし、この市町村を舞台

に、今回の講演を念頭に置きつつ、この資源を生かした観光の戦略を検討するのが、今回のグループディスカッションである。

その際、HOPSの専任教員を中心に北大教員5人が助言者として各班にそれぞれ同席し、2名が講評に備えて各班を巡回した。また、各班に記録係を配置した。

- A班 池 直美 教授 (HOPS)
- B班 武藤 俊雄 准教授 (HOPS)
- C班 今井 太志 教授 (HOPS)
- D班 中村 健吾 特任准教授
(広報・社会連携本部)
- E班 田中 謙一 教授 (HOPS)
- 巡回 中山 隆治 教授 (HOPS)
- 巡回 小泉 大輔 准教授 (観光)

6.8 発表

グループディスカッションにより、各班が、それぞれの地方の架空の町を舞台に策定した観光戦略について発表した。

【A班・主に道北地方からの参加者】

A班は、参加者が各地域の観光資源を持ち寄り、道北の架空の町「トウンベツ町」を題材に観光プランを発表した。岩内のロッククライミング、留萌のテトラポット、遠軽の鉱山や砂金などお宝を組み合わせ磨き上げ、「日本の自然を楽しむ」をコンセプトに据えた。前日の講演内容を踏まえた地域ならではの観光ストーリー、ガイド育成や多言語対応、宿泊・食との連携について検討を行う中で、地域内外をつなぐ観光づくりについて議論が深まった。

【B班・主にオホーツク地方】

B班は、雲海や流氷、多様な生き物等の自然が豊かな「北見町」という架空の町を想定し、季節の水の移ろいをテーマとする着地型観光を提案した。具体的には、春は生物観察、夏は雲海、秋は釣り、冬は流氷鑑賞のように水に関する春夏秋冬をストーリー化し、各季節のツアーをパッケージ化

する。また、その担い手として地元の高校生をガイドとして育成し、報酬や学びで地元愛の醸成や人材育成を行う仕組みも盛り込んだ。

【C班・主に後志地方】

C班は、後志地方の自然豊かな町を想定し、「いもといしとれきし 満点 (マウンテン) b (バイク)」と題した旅行商品の提案を行った。その中では、主要な商品であるじゃがいもを活用した料理、特徴的な資源である黒曜石の採取や包丁づくりの体験、秘境駅や旧道、大仏の見学などの要素を含んだツアーコースの詳細に加え、ターゲットを道外から来る日本人、またインバウンドの旅行者と設定すること、移動手段は8名乗りの乗用車による運転手兼ガイドによるものであること、金額は20000円程度の商品となる旨が説明された。

【D班・主に道南及び胆振地方】

D班は、道南胆振地域にある架空の町「海一町」を舞台とする、富裕層家族向け2泊3日のラグジュアリーツーリズムを企画した。昆布を核に父は漁師体験、母は料理、子は利き出汁と役割を分担し家族で食文化を学ぶ。宿泊は貸切コテージで夜景や地元食材を堪能。価格は4人家族で100万円、荒天時は代替プランで50万円割引する。昆布のCO2吸収力を活かし、SDGsや地域産業継承への貢献も意図した。

【E班・主に十勝地方】

E班は、架空のまちを「トカプ市」、キャッチコピーは「コロボックルは、すべてを見ている」とした。アイヌ伝承に登場するコロボックルが、十勝の歴史を150年にわたり見守ってきたという設定である。ブランドイメージは「Deep TOKACHI」とし、観光商品として、ジビエ・狩猟見学ツアー、ナイトツアー (星空・オーロラ・野生生物)、コロボックルとアイヌの足跡をたどる旅、鉄道まるごと体験を挙げた。課題は

ハンターや学芸員、鉄道関係者など専門人材の確保とした。

6.9 講評

各グループによる発表に対しては各班を巡回していた2人、ゲスト講師の一人である小泉大輔准教授とHOPSの中山隆治教授が講評を述べた。

【講評（小泉准教授）】

小泉先生は、短時間の企画ながら各班の発表に地域資源を活かす可能性を強く感じたと総括した。

A班は、本州から見ると有名資源が乏しい道北において、旭川空港を起点に体験を組み合わせた点を評価し、北海道らしい「一度は訪れたいエリア」としての魅力があると述べた。

B班は、水を軸とした年間パッケージを学校単位で売り込む発想が興味深く、喜多方市職業訓練校や三笠の高校生レストランの事例のように教育と観光を結びつける試みとして有効だが、品質確保の難しさという課題もあると指摘した。

C班の後志は、ニセコのイメージが一人歩きする中で倶知安や岩内などの文化を組み込み、地域本来の魅力を発信した点を評価し、ニセコ周辺をより深く理解してもらう契機になり得ると述べた。

D班は鹿部町の昆布を題材にした体験プログラムについて、宿泊施設の選定や漁協・住民へのアプローチ方法を工夫すれば、広報効果を含めて着地型観光のモデルとなる可能性が高いとした。

E班の十勝は、地域の魅力をマーケティング的に整理し、一つの観光パッケージとして成立し得る点が評価された。

最後に、青森奥津軽の地吹雪ツアーの例を引きつつ、地元住民との協力にはリスペクトが不可欠であり、その仲介や後押しを担える人材の存在が重要だと強調した上で、

本プログラム参加者が将来の地域観光を担う人材として活躍することを強く期待すると結んだ。

【講評（中山教授）】

続いて中山教授が講評を述べた。

A班に対しては、鉱山や砂金、エンターテインメント作品の物語などを軸にしたストーリー性は評価するが、一方で、資源として挙げたロッククライミングやテトラポットを直列的に組み込んだ点は惜しく、別々に展開するとより良いのではないかととの指摘があった。

B班に対しては、四季を通じたプログラム設計という発想が面白く、子どもを対象とする一年を通したプログラムとしてサービスを提供するといった、教育分野への応用可能性があるとの指摘があった。

C班に対しては、子ども時代に地域体験を積むことは、将来的に地元回帰率を高めるとの調査もあり、地方創生に資する視点であり、重要であることと、黒曜石や縄文文化を活かした食や体験はストーリー性を感じられること、秘境駅など着実にあるコアなニーズを探ることも良いのではないかととの指摘があった。

D班に対しては、観光資源を昆布一本に絞るといった、一点集中のプログラム設計はわかりやすく面白いとの指摘があった。

E班に対しては、ナイトツアーに関して、昼間はツアーに参加しない人でも、ナイトツアーだけは参加する人もおり、コンスタントな収入が見込めるため、ガイドから見ても有用であること、星空を眺めるだけでも都市部住民の需要と合致するが、特に発光生物がいるとより集客が見込めること、コロボックル伝承を取り入れたストーリー性が良いとの指摘があった。

総じて、短期間での議論ながら各班に光るアイデアがあったことを評価し、今後はそれぞれの地域でじっくりと具体化を図る

ことを期待すると述べた。

6.10 閉講挨拶他

北海道大学公共政策大学院長 岩谷 將より、閉講挨拶として、参加者の熱心な受講姿勢を讃えるとともに、今後のそれぞれの取組みへの反映を期待するとした。またHOPSにおいても今後も地域の自治へのかかわりを深めていくことが述べられた。

その後、記念写真を撮影し、解散した。

7. アンケート

受講者に対しては、終了後にアンケートを実施した。それに対する回答を集計した結果は、下記7.1～7.12のとおりである。

アンケートの回収率

	サンプル数	受講者	回収率
1日コース	13人	17人	76.5%
2日コース	27人	34人	79.4%
計	40人		

回答者の受講コース (回答件数：40件)

	人数	割合
1日コース	13	32.5%
2日コース	27	67.5%
計	40	100.0%

7.1 年齢 (回答件数：40件)

	件数	割合
20歳代	4	10.0%
30歳代	9	22.5%
40歳代	12	30.0%
50歳代	6	15.0%
60歳代	6	15.0%
70歳代以上	3	7.5%
計	40	100.0%

7.2 性別 (回答件数：40件)

	件数	割合
男性	30	75.0%
女性	10	25.0%
計	40	100.0%

7.3 受講回数 (回答件数：40件)

	件数	割合
初めて	24	60.0%
2回目	8	20.0%
3回目	3	7.5%
4回目以上	5	12.5%
計	40	100.0%

7.4 受講申込契機

(複数回答方式による回答件数：49件)

(受講申込契機)	件数	割合
新聞記事	1	2.5
北大のWEBサイト	8	20.0
研修会でのチラシ	3	7.5
議会内の掲示	2	5.0
議会事務局からの案内	6	15.0
北海道からの案内	2	5.0
市町村からの案内	10	25.0
上司の薦め	3	7.5
知人の紹介	6	15.0
フェイスブック等SNS	2	5.0
その他	6	15.0

7.5 講演① (回答件数：40件)

	件数	割合
良い	16	40.0%
やや良い	14	35.0%
普通	7	17.5%
やや良くない	1	2.5%
良くない	2	5.0%
計	40	100.0%

7.6 講演② (回答件数：40件)

	件数	割合
良い	30	75.0%
やや良い	5	12.5%
普通	4	10.0%
やや良くない	1	2.5%
良くない	0	0.0%
計	40	100.0%

7.7 講演③ (回答件数：40件)

	件数	割合
良い	16	40.0%
やや良い	16	40.0%
普通	6	15.0%
やや良くない	2	5.0%
良くない	0	0.0%
計	40	100.0%

7.8 講演④ (回答件数：31件)

	件数	割合
良い	16	51.6%
やや良い	14	45.2%
普通	0	0.0%
やや良くない	1	3.2%
良くない	0	0.0%
計	31	100.0%

7.9 グループディスカッション①

(各自作成のレポートに関する発表と討議)

(回答件数：27件)

	件数	割合
良い	13	48.1%
やや良い	5	18.5%
普通	9	33.3%
やや良くない	0	0.0%
良くない	0	0.0%
計	27	100.0%

7.10 グループディスカッション②

(着地型旅行コンテンツの検討と観光まちづくりと市町村の役割についての討議)

(回答件数：27件)

	件数	割合
良い	15	55.6%
やや良い	8	29.6%
普通	4	14.8%
やや良くない	0	0.0%
良くない	0	0.0%
計	27	100.0%

7.11 発表及び講評 (回答件数：27件)

	件数	割合
良い	17	63.0%
やや良い	7	25.9%
普通	3	11.1%
やや良くない	0	0.0%
良くない	0	0.0%
計	27	100.0%

7.12 全体 (回答件数：40件)

	件数	割合
良い	26	65.0%
やや良い	9	22.5%
普通	4	10.0%
やや良くない	1	2.5%
良くない	0	0.0%
計	40	100.0%

8. 懇親会

2日コース参加者と関係教員のみ、会費制により、8月20日(水) 18:00~20:00 北海道大学「カフェ de ごはん」において、懇親会(立食パーティ)を行った。

翌日のグループディスカッションの班分けで懇親を深めてもらうなどして、翌日に向けたアイスブレイクともなった。

9. 反省点・今後の課題

まず、経営上の反省点としては、1日コースの参加者が予想より少なく、会計上赤字を出したことがあげられる。原因はPR不足と考えられる。本サマースクールは、元々道内向けであり、PRも道内向けが中心だったが、1日コースはオンラインであることから、全国に向けた発信も必要ではなかったかと反省している。ただし、全国に向けた有効なPR手法がなく、発信には限界もある。その一方で、1日コースの受講料を下げる、無償化することにより、継続的に毎年度行うサマースクール2日コースへの広範な参加を促すことに繋がる可能性もある。これらは今後の課題である。

また、運営上の反省点としては、オンライン参加者から、オンラインで声が聞こえない等、オンラインの技術上の苦情があった。また、ZOOMで画像共有ができなくなるなどの事故もあった。事前事後の連絡もれも指摘されている。これらのこともあってか1日コース参加者への対応が雑だという指摘もあった。リモートの技術的な問題はマイクを取り換えるなどの対応により当日中に修正していくことができたが、雑という指摘については、例えば、1日目終了時点で挨拶を挟む、写真撮影をリモートで行う等、プログラムの工夫の余地がある。

今回HOPS学生の1日コース参加を認めたものの実際の参加者は少なかったのは残念であった。レベルの高い講義が行われているのに学生の参加が少ないのは惜しい。理由は就職活動等との兼ね合いの難しさであり、集中講義の日程との関係を整理して日程を見直す等により改善の可能性もある。

10. おわりに

2日コース参加者は、自らの地元の豊かな自然資源の活用について、同じ悩みを共

有する仲間と議論をすることを通じて、それぞれの市町村の特徴を生かした観光まちづくりについて理解を深めるとともに、これからの地域づくりに向けて士気を高めたように見受けられた。

また、1日コース参加者も、アンケート結果から、各講師の経験に裏付けされた観光まちづくりへの姿勢と理念を学ぶことにより何かを得ていただけたと考えている。

今後は、それらを自らの市町村における取組みに着実に結び付けるよう大いに期待したいし、それを支援することができるHOPSでありたいと考えている。

11. 謝辞

今回の講師、寺崎、寺本、海津各先生には、無理なお願いにもかかわらず、ご多忙の中、遠隔地より駆けつけ、充実した講演を賜りましてありがとうございます。

北海道等、後援・協力等各機関には、関係者へ周知いただき、感謝します。

学内では、講演・講評までお願いした小泉先生、挨拶をお願いした行松理事や岩谷院長、助言者をお願いした池、中村両先生、広報や会計上の手続等でご尽力いただいた大学事務局職員に感謝します。

今回のサマースクールには、下記の学生・学生OBがボランティアやアルバイトとして参加し、記録係（本報告の原案の多くは彼らの手による。）や受付等に対応してくれました。感謝します。

阿部大祐(OB) 木村太河(観光学院)

早川直喜* 伴星佳* 二木匡(OB)

宮本英昌* 八木滉一* (*はHOPS学生)

そして、最後になりますが、北海道各地から多くの参加をいただいた参加者の皆様(特にリピーター)と、こころよく派遣して下さった派遣元の道・市町村・議会関係者に、この場を借りて御礼申し上げます。

プログラム

2025年8月20日(水) 13:30～17:30 【2日コース／1日コース】

時 刻	内 容
13:30	開講
13:30～13:40	開講挨拶 北海道大学理事 行松 泰弘
13:40～14:00 (20分)	趣旨説明「北海道の豊かな自然と資源を活用した観光まちづくり」 北海道大学 教授 中山 隆治
14:00～15:00 (60分)	講演① 「地域資源の観光活用 ～魅力づくりの事例集～」 静岡県立大学 講師 寺崎 竜雄
15:10～16:10 (60分)	講演② 「につぼんの田舎を元気にする！」 (株) Local Governance 代表 寺本 英仁
16:20～17:20 (60分)	講演③ 「エコツーリズムと宝探しによる観光まちづくり」 文教大学 教授 海津ゆりえ
17:30	閉講

18:00～20:00 懇親会「カフェ de ごはん」2日コース参加の希望者のみ・会費制

2025年8月21日(木) 10:00～16:00 【2日コース・1日コース(講演④のみ自由参加)】

時 刻	内 容
10:00	開講
10:05～11:05 (60分)	講演④ 「信州いいやま観光局と着地型コンテンツ開発」 北海道大学 准教授 小泉 大輔
11:10～11:20	グループディスカッションの進め方の説明
11:20～12:00	グループディスカッション①各自作成のレポートに関する発表と討議
12:00～13:00	昼食・休憩
13:00～14:30	グループディスカッション②着地型旅行商品づくりをはじめとする観光まちづくりに関する市町村の戦略の討議
14:40～15:20	各グループによる発表
15:20～15:40	講師による講評
15:45～15:55	閉講挨拶 北海道大学公共政策大学院長 岩谷 将
15:55～16:00	記念写真撮影
16:00	閉講